論　説

# フォークランド戦争の前兆（２）
## ―― South Georgia 問題 ――

梅　川　正　美

はじめに
（１）　South Georgia 問題
（２）　３月25日から29日まで
（３）　３月30日
（４）　３月31日
まとめ

## はじめに

フォークランド戦争は、なぜおきたのか。なぜ止めることができなかったのか。この点は、かならずしも明らかではない。フォークランド諸島は、イギリスからは、はるか遠方にあり、約200の諸島で構成されている。1982年当時、イギリス政府は、この諸島について、ほとんど関心をもっていなかった。ところが、まさに突然、大規模な戦争になる。

戦争は、1982年４月２日に、アルゼンチン軍がフォークランド諸島に侵攻・上陸したときから始まる。しかし、この前兆は、すでにあったことはすでに述べた。特に1982年１月には、South Georgia 諸島の領空侵犯事件がおきている。(1)

さらに、３月には、アルゼンチンの民間人が South Georgia 諸島に無断

上陸しており、これにつての対応で、イギリス政府は混乱を続ける。特に、従来のイギリス政府の政策は、リースバック政策であり、フォークランド諸島の主権をアルゼンチンに譲渡したうえで、この土地を借り上げることを考えており、この点は、すでにアルゼンチンに伝わっていた。しかし、その基本認識となる、従来の主権の問題については、まったく違っていた。

この South Georgia への無断上陸をイギリス政府がどう解釈するかという点こそ、大規模な戦争を、イギリス政府が事前に察知するかどうかの分岐点であった。本稿の目的は、 3 月19日にはじまる South Georgia 問題についてのイギリス政府の対応について述べることである。

## （1） South Georgia 問題

アルゼンチンの民間業者である Constantino Davidoff が、1982年の 3 月25日に、駐アルゼンチンのイギリス大使である Anthony Williams に書簡をおくり、South Georgia 問題について弁明をしている。

それによれば、彼は、South Georgia の一部の施設を借り受けている。それは、1979年の 9 月19日のことである。その施設は、もともとは、イギリスのエディンバラに本拠地をおくイギリスの企業である Christian Salvesten 株式会社のものであった。この会社は、South Georgia に捕鯨のための基地をもっていたが、Davidoff が、この中古基地を賃借 the lease of our out of use whaling station する契約を結んでいる。それにあわせて、この施設に付属する設備 equipment and installations については、所有権を獲得 the vendor transferred ownership している。

この賃借および売買の契約は、ロンドンの認証機関である Ian Roger Frame によって認証されているという。さらに同契約は、1980年 8 月27日

（1） 梅川正美「フォークランド戦争の前兆（1）―領空侵犯―」愛知学院大学論叢『法学研究』第56巻第 1 ・ 2 号、203-208頁。

に、書簡によって、フォークランド諸島政府にも届けられているという。[(2)]

ところが、この基地がある South Georgia 諸島は、イギリス政府と、アルゼンチン政府の両方が、領有権を主張している諸島であった。イギリスからすれば、たとえアルゼンチン人が借り上げた基地であろうと、そこへの外国人の立ち入りは、イギリス政府、具体的にはフォークランド諸島政庁の管理するところであった。アルゼンチン政府からすれば、この諸島は、アルゼンチンの領土であり、ここへの立ち入りは、自由にできるはずであった。

1981年12月11日に、Davidoff の雇用する７～８人が、アルゼンチン大西洋グループの船によって、前に捕鯨で利用していた３つの基地の調査をして設備の表をつくるために立ち寄るという書簡をイギリス大使館に出したという。さらに Salvesten 株式会社から買い取った設備を解体して運び出すために、41人を上陸させるという書簡を３月９日に大使館に出し、さらに３月11日には、大使館の要請によって、運輸船にアルゼンチンの国旗もかかげたし、人員のリストも提供したという。[(3)]

では、この South Georgia 問題について、イギリス政府はどのように認識していたのだろうか。この点について、３月30日の午後、South Georgia 問題について、貴族院では、外務大臣の Lord Carrington が説明をする予定であり、庶民院では外務副大臣の Richard Napier Luce が説明する予定であった。この二人の説明の原稿を、イギリス外務省・南アメリカ局の P. R. Fearn が、同日の午前中に書いている。その原稿の中で、次のような認識が述べられている。

Davidoff に雇用されたアルゼンチン人の一団が、３月19日に、South Georgia の Leith Harbour で、アルゼンチンの海軍の輸送船から上陸した。Davidoff には、イギリス政府から、上陸して作業をするなら、South Georgia の中心都市である Grytviken のイギリス政府の役所に、許可を求

（２）　Constantino Davidoff to Anthony Williams, 25 March 1982: FCO/4920.
（３）　Ibid.

める必要があることを、あらかじめ伝えてあったという。

しかし、彼らは、彼らがLeithに到着したとき、必要な書類の提出を、イギリス側にしなかったし、Grytvikenに出頭するように要請しても、この要請に応じなかった。たとえDavidoffが基地の賃借の契約をしているとしても、アルゼンチンの一団は、通常の入国管理の手続きを免除されるものではない。その後、多くの者は立ち去ったとはいえ、約12人が残っており、これは引き続き問題であるとされている。

そこでイギリス政府は、アルゼンチン政府に対して、彼らの滞在は違法であるので、アルゼンチン政府が、彼らを立ち去らせるために協力するよう要請した。もし滞在したいのであれば、通常の入管の手続きをするように述べた。さらに、HMS Enduranceに対して、ここに行くように指示している。

ところが3月25日、アルゼンチンの船舶が、さらなる設備を荷揚げした。しかも、アルゼンチンの外務大臣は、South Georgiaにいるアルゼンチン人は、アルゼンチン政府の保護を受けると述べ、この近辺まで、アルゼンチンの軍艦を派遣している。

状況は、このようであり、潜在的な危険をはらんでいる。フォークランド諸島の属領の主権問題が発生している。これはフォークランド諸島自身の問題になる可能性がある。イギリス領土におけるアルゼンチン市民の違法滞在は、受け入れることはできない。イギリス政府は、商業的な契約を阻害するわけではないが、その活動は、政府によって承認されたものでなければならない。

イギリス政府は、事態を悪化させようとは思わないが、外交的な解決を望んでいる。アルゼンチン政府も同じ考えをもってくれることを望む。これがイギリスで、South Georgia問題とされた内容であり、それについての、3月30日時点での、イギリス政府の公式見解である。ここには、軍事的な対立になるという予測は、まったく出されていない。(4)

## （２）　３月25日から29日まで

上にFearnが書いた楽観的な認識は３月30日のものである。この認識が形成されるのに、数日かかっている。25日から30日までのあいだに、政府の内部では、非常に緊迫したやり取りが行われているので、本稿では、それを追いながら、数日の政府の内的な検討をする。

まず３月26日、外務省副大臣Luceの秘書官であったJ. M. Cresswellが、外務省南アメリカ局の秘書官に出したメモによると、26日の時点では、外務省も防衛相も、South Georgia問題がどの様に発展するか、予測しかねている。そこで、アルゼンチンに対する対応も、一応複数のオプションを考えている。

防衛相の秘書官であるWigginは、外務省のLuce副大臣に、26日の朝、電話して、HMS Enduranceが、数週間、そこにとどまることに同意している。そこで、防衛省と外務省は、このことを、いつ、どのようにして、発表するかを検討している。Wigginは、HMS Enduranceが２か月または３か月、フォークランド諸島にとどまってもよいと示唆した。しかし、長期的な問題はのこるとしており、それは、予算の問題であるとしている。HMS Enduranceの改善には250万ポンドの資金が必要であり、その維持費は、年に200万ポンドであることを指摘している。Luce副大臣は、HMS Enduranceを派遣することで、議会対策と世論対策では十分であると考えているとのべている。

Wigginは、HMS Enduranceを補佐するために、３月29日に、戦艦を一隻、Gibraltarから出港させるよう命令している。その戦艦が現地に到着するためには、３週間はかかると述べている。さらに防衛省は、HMS Enduranceに交代する戦艦の派遣も検討しているという。さらに、

（４）　P. R. Fearn, South American Department, *South Georgia: Parliament Statement*, 30 March 1982: FCO/4920.

Wigginは、HMS Enduranceの船長が、必要だと判断すれば、ヘリコプターを使うことも許可したという。しかし、この26日の時点では、外務省も防衛省も、大規模な戦争になることを、まったく予測しておらず、戦艦の一隻くらいの必要性があると考えていたことがわかる。(5)

3月26日にもどるが、同日の10時30分に、Luce外務副大臣は、リオデジャネイロから、電話をもらっている。この人物は、2月22日に、アルゼンチンの外務大臣であるCosta Mendezと会談をしたとして、そのときのことを申し上げるとしている。そのレポートは長いものであるが、要約すると、Costa Mendezは次のよう語っている。第1は、フォークランド諸島についての世論の圧迫が強いこと、さらに軍からの圧迫がつよいこと。第2に、フォークランド諸島の主権の問題は「プライドの問題」であり、他の物的問題は、重要ではないこと。第3に、リースバックについての協議を、別の名目で、新しい基盤で、再開させたいこと。第4に、イギリスも同じように、世論や議会の圧迫があることである。

このレポートの筆者は、この2年ほど、アルゼンチンのペースで、ことが運んできたが、アルゼンチン側が忍耐するように要請したと述べている。さらに、アルゼンチン軍による軍事的な侵略は、ありそうにないという印象をうけたとしている。しかし、South Georgiaへの上陸の可能性を示唆し、Costa Mendezは、彼が世論を制御できないことを強調したという。そこで、アルゼンチン政府における文民の力について疑念を抱いたという。フォークランド諸島のイギリス人とイギリスの利益のために、わたしたちは、どこまで行かなければならないのか、わからないと述べている。

この電話をしてきたのは誰かについての、明白な記録がない。しかし、イギリスの国内からの電話ではなく、ブラジルのリオデジャネイロからの電話であるので、駐ブラジルのイギリス大使と考えることも不可能ではな

---

（5） J. M. Cresswell to Private Secretary, 26 March 1982: FCO/4920.

いが、アルゼンチンの外務大臣との会談をした人物であるので、駐アルゼンチンのイギリス大使である Anthony Williams とも思われる。この電話は、アルゼンチン政府における文民の力に不安をいだきながらも、リースバック政策が成功するのではないかという期待をもっているし、軍隊の暴発の可能性は、婉曲的に否定している。

その2日後の3月28日には、South Georgia 問題の法的解決について外務省の R. F. Cooper がレポートを出している。このレポートによれば、この報告は、アルゼンチン人を速やかに国外に退去させるための法的な解決はないかどうか、外務大臣から諮問されて、作られたものである。第2に、これによると、今回の事態についての、国際的な法的機関は、国際司法裁判所であるとされている。しかし、国際司法裁判所に訴えるためには、紛争状態にある両当事者が同意しなければならず、アルゼンチンが、これに同意するとは考えにくいとされる。

第3に、たとえアルゼンチンが同意しても、裁判所の決定がでるまでには、何か月もかかるだろうし、裁判所の決定が、イギリスに有利なものになるかどうかは、わからないと述べている。イギリスが主権をもっていることは明らかとしても、裁判所は、第3世界や、東側に、有利な決定をだすことが多いし、アルゼンチンは、イギリスは植民地支配を継続させているという反発を強くするだろうとしている。

第4に、当面行うべきことは、国際司法裁判所に訴えるかもしれないと述べることであり、これには有利な面があるという。アルゼンチンが提訴を拒否したとき、イギリス側がとる措置はないとしても、アルゼンチンの行動は誤っていることになる。しかも、もし訴えるとなると、アルゼンチンは、問題を South Georgia に限定するのではなく、フォークランド諸島全体に広げる危険性がある。第5に、したがって、国際司法裁判所に訴える前に、法務関係者によく検討させることが必要であるとしている。(6)

（6） R. F. Cooper, Senior Resident Clerk, South Georgia: Legal Action, 28 March 1982: FCO/4920.

翌日の3月29日には、外務省南アメリカ局のP. R. Feanから、同局のJ. B. Ureに対してメモが送られている。これによると、アルゼンチンの代理大使であるMolteniから、29日の午後おそくに、Feanに電話があった。Molteniは、前にのべた、Costa Mendezの見解についてのイギリス政府の反応をきいてきたのである。そこで、Feanは、第1に、Costa Mendezの見解には建設的な提案がないので失望したと述べ、今回のSouth Georgiaの件は、1971年の通商協定によって弁解できるものではないと述べている。

第2に、Feanは、イギリス政府が、South Georgiaに上陸しているアルゼンチン人は、通常の入管手続きをしなければならないと通知したことを、想起させた。しかしMolteniは、HMS Enduranceが派遣され、結果的に問題が拡大された以上、イギリス政府が言うような通常の解決方法はありえないと述べている。

しかも、Molteniは、South Georgia問題を、フォークランド諸島問題全体を解決する材料にしろというアルゼンチンの強硬派からの圧迫が強いことを示して、これに対する懸念を述べている。これはアルゼンチン政府の立場ではないとしても、世論はそうなっているという。もしこの状況を打開できる方法があるとすれば、ニューヨークでの、主権に関する、積極的な提案をイギリス政府がすることであると主張している。Feanの考えでも、この時期の緊張の緩和が行われたあとになるとはいえ、そのような恒久的な交渉についてのイギリスの積極的な反応のみが、現在突き刺さっているトゲを抜くために、唯一の方法であり、これは両者の一致点であった。

第3に、しかし、Feanは、そのような方法は、困難であることを説明している。イギリスの世論は、反対を向いていることも説明し、Feanは、アルゼンチンがいう交渉について、イギリス政府が積極的な態度を示すことが、政治的な問題をはらんでいることは明らかであると判断している。だから、おなじ外務省でも、Feanは、Carrington ほど楽観的ではな

かった。[7]

## （３）　３月30日

その翌日の３月30日には、多くの電報などが行きかっている。同日14時00分に、外務大臣の Lord Carrington がアメリカ合衆国政府に、電報を打っている。それによると、外務大臣は、アメリカ大使に連絡をとりたかったようであるが、大使が不在であったので、Streator 氏に連絡をし、South Georgia 問題で、「私はアメリカ合衆国に支援を要請した」と述べている。しかし、うまくいかなかったようであり、そこで Carrington は、これまでイギリスはアメリカ合衆国の支援をしてきたことなどを述べ、再度、この問題で支援を要請している。[8]

３月30日の16時00分には、外務大臣の Carrington からアルゼンチンのイギリス大使館とフォークランド諸島の総督、および海軍 Moduk 基地に対して電報が打たれている。前に述べたように、３月30日に、South Georgia 問題について、貴族院で Carrington が説明をする。南アメリカ局の P. R. Fearn が、その原稿を書いたが、その内容は、前に示した。その内容が、すでに、この電報が打たれた相手には、打電されていた。それを確認したうえで Carrington は、重要なことは外交交渉であり、事態を拡大しないことだと言い、前述の Costa Mendez のメッセージの線で、次のステップを考えると述べている。Carrington は、このときのフォークランド諸島問題を、アルゼンチンに妥協する外交交渉で解決しようと考えていたのである。[9]

３月30日の17時00分に、Carrington は、駐アルゼンチンのイギリス大

（７）　P. R. Fean to Mr. Ure, 29 March 1982: FCO/4920.

（８）　Carrington to Washington, Telegram Number 600 of 30 March 1982: FCO/4920.

（９）　Lord Carrington to Buenos Aires, Moduk NAVY, FCO, Port Stanley, HMS Endurance and Cincfleet, Telegram Number 301425Z of 30 March 1982: FCO/4920.

使に電報を打ち、次の内容をアルゼンチンの外務大臣に伝えてほしいと述べている。イギリス政府の目的は、イギリスとアルゼンチンの両国政府が満足できる解決方法をみつけることである。この限界をこえるような対立、あるいは、フォークランド諸島問題を平和的に解決しようとする、われわれの努力を阻害するような対立は、われわれの、いずれの政府にとっても利益となるものではない。貴殿が、イギリスの大使と議論した線で、問題を解決することを期待している。そこで、貴殿と協議するために、私の代理として、外務省高官である John Ure を派遣することを提案する。今回の事件の危険をとりのぞき、先月、ニューヨークで、アルゼンチンの大使である Ros と、Richard Luce が、行った協議を再開することが必要である。このように、Carrington は述べており、リースバック協議の再開で、事態が打開できると思っていた。(10)

しかし、3 月30日の14時25分（イギリス時間で17時25分）に、駐アルゼンチンのイギリス大使である Anthony Williams が、イギリス海軍や外務省およびフォークランド諸島政庁などに電報を打ち、アルゼンチンの海軍が配備されたことが通知されている。それによれば、2 隻の駆逐艦と 2 隻のコルベット艦が South Georgia に向かっている。その中には、戦艦 Belgrano も含まれているし、兵員は、この Belgrano から60キロ圏内に配備されているとされている。Williams は、外交交渉の限界を示唆しているのである。(11)

3 月30日の17時35分には、アメリカ合衆国大使館の Henderson から電報がはいっている。彼は、ホワイトハウスの高官 Clark と協議したそうである。アルゼンチンが他国を占領しようとしているとき、アメリカ合衆国が中立姿勢をとることについて、イギリス政府の考えを述べたという。も

---

(10)　Lord Carrington to Buenos Aires, Port Stanley 〈Personal for Governor〉, Washington, Telegram Number 77 of 30 March 1982: FCO/4920.

(11)　Anthony Williams to Moduk NAVY, FCO, Port Stanley, HMS Endurance and Cincfleet, Telegram Number 301425Z of 30 March 1982: FCO/4920.

し、これがアメリカ合衆国の領土であれば、アメリカ政府は容認しないだろう。エルサルバドルの事件のときは、イギリスは、同盟国として、アメリカ合衆国を支援した。Clark は、Haig がまもなくホワイトハウスにくるので、その後、彼と協議すると述べたという。30日の14時00分に、イギリス外務大臣がアメリカ政府に、イギリス側に立って支援を要請して、うまくいかなかったことは、前にも述べた。同じ30日17時35分においても、アメリカ政府は積極的ではないのである。(12)

駐アルゼンチンのイギリス大使である Anthony Williams は、30日の18時35分（イギリス時間で21時35分）に、イギリス外務省に電報を打っている。それによればアルゼンチンの新聞である La Prensa で、コラムニストの Iglesias Rouco が述べていることだが、信頼できる情報によれば、イギリスは、Leith にいる人たちは、HMS Endurance によってではなく、アルゼンチン軍によって、撤退させるべきだと主張した。アルゼンチンは、この問題の解決については、フォークランド諸島問題の全体的な協議の中で議論されるべきだと主張した。この新聞 La Prensa は、社説で、主権問題の紛争の中で、この事件は避けられないものだったとし、協議の再開と迅速な進行の必要性を示すものであると論じている。つまり、アルゼンチン側の議論は、主権問題であった。イギリス側では、上陸した人の入管手続きを問題にしており、おおきく、すれ違っている。(13)

Anthony Williams は、３月30日の20時50分（イギリス時間で23時50分）に、ブエノス・アイレスから、外務省に電報を打っている。これはきわめてリアルなものである。Williams は、彼自身が直接アルゼンチンの大統領と接触したわけではないが、アメリカの政府の Stoessel からの情報を伝達している。Stoessel は Costa Mendez に、この日である30日の午前中に面会している。その印象によれば、Costa Mendez の反応は、完全に否定的であった。この Stoessel は妥協的な提案をしたのであるが、アルゼ

（12）　Henderson to FCO, Telegram Number 1030 of 30 March: FCO/4920.
（13）　Williams to FCO, Telegram Number 123 of 30 March: FCO/4920.

ンチンには、まったく受容されなかった。もし紛争をさけるつもりなら、アルゼンチンの労働者に対して、イギリスは何もしないことであると言われている。唯一の解決策は、主要な問題の交渉の再開であるとされている。つまり、主権協議の再開である。

アルゼンチン政府の、このような非妥協的な態度は、アルゼンチンの政府の経済政策に対する労働組合のデモが計画される直前に、示されている。政府は、侵略的な情熱を示すことで、労働組合のデモを回避することができると考えた。これによって、Costa Mendez の反応もまた、引き起こされている。

アメリカ政府の Stoessel は、この後に、大統領に会うときは、それまでのような不愛想な態度はとれないと思うようになったという。今のところ、アルゼンチン政府は威勢がいいし、イギリスを主権交渉に引き出す道を発見したと信じている。しかし、この政権の安定が保障されているわけではないし、確実な将来性をもっているわけでもないという。

このような環境にあって、イギリス外務省が考えているような、妥協的な結論を、そんなに急いで出すことには、Williams は懐疑的であると述べている。さらに Williams は、自分がアルゼンチンとの交渉の窓口になるとしても、自分は、責任をとれないとまで言い、とにかく、1 日か 2 日の間、アルゼンチンの動きを見たほうがいいと述べている。このように、Williams は、イギリス的な外交交渉には、次第に、悲観的になっているのである。(14)

ところが、3 月30日の23時20分に、Carrington は、駐アルゼンチンのイギリス大使館などに電報を打って次のように述べている。テレビ報道 ITN Tonight は、今夜、原子力潜水艦が一隻、フォークランド諸島にむけて、出発し、やがて、二隻目の原潜が出発すると報道している。しかし、防衛省は、これについて一切コメントしていない、と述べてほしい。これは、

(14)　Williams to FCO, Washington, Port Stanley Telegram Number 126 of 30 March: FCO/4920.

アルゼンチンを刺激しない目的があったのだろうし、外交交渉で問題解決するという、彼の方針をしめしている。(15)

外務省は３月30日にも、ひきつづき国際司法裁判所への提訴を検討している。法律顧問の K. J. Chamberlain は、南アメリカ局の Bright への書簡の中で、フォークランド諸島問題の全体を国際司法裁判所に訴えることについては、アルゼンチンが応じるだろうと考えることは、現実的ではないと述べている。しかし、もしアルゼンチンが応じた場合には、フォークランド諸島問題全体を、提訴することは、イギリスの利益になるかもしれないという。もっとも、その際、the South Sandwich Island は失うだろうと論じている。それでも、フォークランド諸島と South Georgia にとっては、よいだろうとしている。(16)

３月30日、J. B. Ure は、秘書官 Giffard に書簡を送り、この30日の午前中に大臣との会議を行ったことを述べている。その後、Ure が、Costa Mendez の３月28日のメッセージへの返事の原稿を書いている。(17)

Ure の原稿による返事は、30日に、Carrington から、駐アルゼンチンの大使とフォークランド諸島政府の総裁などに、電報で発信されている。それによれば、以下の大臣の見解を、アルゼンチンの外務大臣に伝達してほしいというものである。

その見解の内容によれば、現在進行している危険な事態は、イギリスが予測したものではない。われわれの、望みは、両政府が満足する結論を得ることだ。極端な結果をもたらすような解決方法は、われわれのフォークランド諸島問題解決には、深刻な障害になるものだ。それは、われわれのいずれの利益にもならない。私は、ブエノス・アイレスに高官を送る。South Georgia の事態が、われわれの現状の環境を阻害しないように、解

---

(15)　Lord Carrington to Buenos Aires, Port Stanley 〈Personal for Governor〉, Telegram Number 79 of 30 March 1982: FCO/4920.

(16)　K. J. Chamberlain to Bright, 30 March 1982: FCO/4920.

(17)　J. R. Ure to Mr. Giffard, 30 March 1982: FCO/4920.

決されなければならない。イギリス外務省のアメリカ局を代表して、私設秘書官補である Ure を派遣する。先月、副大臣 Richard Luce とアルゼンチンの Ros 大使との間で行われた協議を再開して、この国境問題を解決したいと思っている。(18)

議会では、この 3 月30日の午後、前にものべたように、貴族院では、外務大臣の Lord Carrington が、庶民院では外務副大臣の Luce が説明している。この日から、議会でも、フォークランド問題が、議題にのぼったのである。

## （4）　3 月31日

3 月31日、ブエノス・アイレスの Williams から、午前 0 時56分（イギリス時間で午前 3 時56分）に、イギリス外務省に電報がはいっている。これによると、South Georgia 問題は「武力的な行動 violent action に、急速に至る可能性がある。しかし、決定的ではなく、アルゼンチンが中止する可能性の方が大きい」と述べている。アルゼンチンで、武力紛争をおこすべきだという点の説得力は「イギリスに力がない powerless という信念の副産物である」と述べている。(19)

イスラエルのテリ・アヴィヴの Moberly（Luce の私設秘書官）から、31 日の午前 9 時55分（イギリス時間で午前 8 時55分）に、イギリス外務省に電報が入っている。これによると、外務大臣は、ブエノス・アイレスにいる大使の考え、すなわち、もし Luce と外務省が了解すれば、返事は、1 日または 2 日おくらせるべきだろうという考えを、受け入れるというものだが、Luce は、この込み入った時期に、イギリスを離れることが良いこと

(18)　Carrington to Buenos Aires, Telegram Numer 116, Port Stanley, Washington, 30 March 1982: FCO/4920.

(19)　Williams to FCO, Port Stanley, Telegram Number 127 of 31 March 1982: FCO/4920.

かどうか、この点について、次第に懐疑的になっている。Luce は、the Lord Privy Seal に伺いをたてたいと思っているし、できるなら首相に相談したいと思っている。(20)

ブエノス・アイレスの Williams（駐アルゼンチンのイギリス大使）から、31日の午前９時45分（イギリス時間で12時45分）に、外務省に電報がはいっている。それによれば、もし和解的なメッセージとそのための特使という方針にこだわるなら、これは、Costa Mendez の非妥協的な請求、それは首相と大統領の直接の交渉を請求するものであるが、これにこたえることではない。首相ではなくとも、例えば Lord Carver や Lord Hill Morton などを派遣して、Mendez の頭越しに、大統領に交渉させるべきである。(21)

この電報にあるように、駐アルゼンチンのイギリス大使である Anthony Williams は、イギリスの高官が、アルゼンチンの大統領と直接交渉する必要があると考えていた。この大使の提言はきわめて重要である。それは、外務省の官僚レベルの交渉では、解決できないことを示しているからである。外務省レベルの交渉は、外交問題が主になるのは当然である。しかし、前に、アルゼンチン大使も述べていたように、外務省が軍を説得できるかどうかは、わからない事態であった。アルゼンチンの当時の政府は軍によって占拠されており、大統領は軍の頂点にいた。イギリス大使の Williams が、大統領と交渉する必要を指摘したことは、問題が、外交では解決しないことを意味していた。

外務副大臣の Luce は、テリ・アヴィヴの Moberly の電報が示すように、自分が特使となることには消極的であった。ならば、さらに重要人物の政治家を派遣する必要があると、Williams は思ったのだが、これには、外務大臣は否定的であった。外務大臣の Carrington は、特使は、Lord Carver や Lord Hill Morton などではなく、実務家レベル working level で行われるべきだと述べている。Carrington こそが、もっとも楽観的で

(20)　Moberly to FCO, Telegram Number 128 of 31 March 1982: FCO/4920.

(21)　Williams to FCO, Williams'Telegram Number 126, 31 March 1982: FCO/4920.

あったことがわかる。[22]

31日に、外務省・南アメリカ局の P. R. Fearn は、同局の J. B. Ure に書簡を書いている。それによれば、この31日に、Ure と議論した内容にそって、ワシントンに電報を打つが、その原稿を送るというものである。

この電報も、きわめて楽観的なものである。まずアメリカ合衆国の政府が、Stoessel を通じて、アルゼンチンに対して行った仲介について感謝し、アルゼンチンの反応に失望したと述べている。さらに、今すぐにアメリカに要請することはないとしながらも、事態を悪化させないために、外交努力をするとしている。そのために、Williams 大使を補佐するための高官を送るという。だから、アメリカ合衆国政府としては、アルゼンチンを、全体的に落ちつかせるために努力し、外交的解決を受け入れるようにしてほしいと述べている。[23]

防衛省の P. J. Weston は、外務省の Fearn に、31日に、書簡を送っている。それによると、防衛省では、31日の午後に、防衛省執行部会議 the Defence Operations Executive を行い、これに Weston が出席して、その内容を報告している。この会議では、防衛省の情報局からの情報が提供され、アルゼンチンの不穏な動きが報告された。問題は、South Georgia ではなくフォークランド諸島そのものの防衛であった。当時の唯一の戦艦は、HMS Endurance であるが、これを、South Georgia にとどめるのではなく、Port Stanley に移動させるべきかどうかを検討したという。しかし、それは実行されず、Grytviken 周辺にとどめることにしたという。

この会議は、HMS Endurance を補助するための戦艦を、Ascension から派遣できないかという、防衛大臣 Nott の要請も検討した。これを実行すると、４月13日くらいには、Port Stanley に到着する予定であるという。[24]

---

(22)　Carrington to Tel Aviv for Private Secretary, Telegram Number 100, 31 March 1982: FCO/4920.

(23)　P. R. Fearn to Mr Ure, 31 March 1982: FCO/4920.

## まとめ

これまで述べてきたように、駐アルゼンチンのイギリス大使であるWilliamsが、次第に悲観的になり、外交交渉の責任はとれないというニュアンスすら出してくる。それに対して、最も楽観的なのが、外務大臣のLord Carringtonである。彼は、事務レベルの外交交渉で、解決すると思っている。副大臣をはじめとする外務省関係者も、Lord Carringtonほどではないとしても、外交交渉での解決に期待をしている。それは、外務省の専門が外交であるという点のみに原因があるわけではないと思われる。なぜなら、防衛省の会議でも、HMS Enduranceの補強程度で解決すると思われていたからである。

このように外務省を中心とする政府官僚の判断の中には、アルゼンチン政府が軍政府という特殊なものであることについての考慮が、ほとんどない。Williamsだけが、何か不気味なものを感じている。しかし、その不気味さは、外務省には理解されなかった。

前に述べたように、3月30日の議会説明では、イギリス政府は、事態を悪化させようとは思わないし、外交的な解決を望んでいるとされ、アルゼンチン政府も同じ考えをもってくれることを望むとしている。

ところが、31日の午後に、はじめてMargaret Thatcherが登場する。問題が、ようやく首相のレベルに到達し、官邸会議が招集され、これに首相と外務大臣、および防衛大臣や、海軍元帥のHenry Leachらが参加する。この会議では、Thatcher首相とLeach以外のメンバーは、フォークランド戦争を行うことには、さほど関心を持っていなかった。しかし首相は、最初から戦争を決心しており、彼女の判断は、これまで述べてきた政府官僚の判断とは、非常に違っていた。この官邸会議ののち、特務艦隊の結成

---

（24）　P. J. Weston to Mr. Fearn, 31 March 1982: FCO/4920.

がはじまり、イギリスは戦争体制に突入する。外交には全くの素人であった Thatcher の登場が、アルゼンチンとの関係を変えたのである。[25]

（25）　梅川正美『サッチャーと英国政治・第 3 巻』（成文堂、2008年）1067-1074頁。